



昭和の碩学 故安岡正篤先生はその著書で「論理」と「道理」について述べておられます。

要約すると、この世に存在するもの、生活するもの、行動するものにはそれぞれ天から与えられた「理」が有る。人がこれを知性、知能というものによって解することを「理解」といい、その理解にも浅い理解（浅解）と深い理解（深解）がある。

この「理」は人間がその知性、知能で解するものであるが、それを実践によって把握するものが「道」である。

すなはち、「道理」には「論理の実践」が不可欠であるという事となる。

人間が動物から進化して次第にものを考え、言語が発達してくると「論理」が発達する。

しかし、「論理」は実践を伴わない。

単に、思惟、思考の中にあるものであって、これに偏りすぎると実践から逆に遠ざかってしまい、「道理」とは異質な「空理、空論」となる。

文明が発達すればする程その傾向は強くなる。

我々は論理的知識を高等なものと考えがちであるが、実は「論理」に走れば走る程、実践である「道」を解さなくなる危険性が高くなるという事にもなる。

古来聞き難きは「道」、天下得難きは「同志」なり という言葉もあり、実践の伴わない「論理」というものが如何に危ういものか、好い加減なものかを知らなければいけないという事です。

最近の国内外の事象を見ていると「論理」的には様々に言う人は多いけれど、それを国家的、世界的視点、あるいは長期的スケールで「道理」として見た場合、衆人の納得を得られない「論理」が多過ぎる様に思われてなりません。

日本の政治を例にとれば、それぞれの発言者の話には大概それなりの「一理」が有るものですが、それが日本の将来から見た場合、「道理」として成り立つかという観点で考えると、はなはだ疑問に思う話が多過ぎる様に思います。

政権与党にも問題は多いとは思いますが、今日まで日本の財政、少子高齢化、外交はじめ、根本的な問題を「道理」的見地から本質的に対策を行わず、場当り的な「論理」の応酬による施策の蓄積の結果、今日の状況まで悪化させてきた野党政治家の与党批判には説得力がないのも確かです。

また、国外に目を転ずれば、国家と国家の間でも自国の国益の話ばかりで、世界の本当の平和や人類の幸せから見た時に、その「論理」の裏に人間のエゴ、国家の利害が透けて見える事が多い様に思います。

我々はこれだけ進化した文明の時代に生きていて、もはや「理論」を競い合うことより「道理」を体得する修練を意識する必要があると思います。

人間は、論争で相手を打ち負かしても、心情的に相手の反感を持たれるだけで、納得させることは出来ないという当たり前の人間の「心理」に気付くべきだと思います。

人が本当に心から納得するのは、その言動が「道理」に合っていると周りに認められた時でしかないと思うのですがいかがでしょうか。